

## 経済学史学会第74回大会セッション

### 現代的問題群の経済思想史：20世紀前半アメリカの視点から

組織者：若田部昌澄（早稲田大学）

現代経済社会のさまざまな問題はどのようにして生じ、どのように捉えられ、そして場合によってはどのように政策の対象とされてきたのだろうか。このセッションでは20世紀転換期から大戦間期にいたるアメリカ経済思想に着目することで、現代経済社会の主要な問題群と経済学との関係を、学史の観点から整理することを目指す。この時代のアメリカは、企業合同運動を経て企業の社会的位置づけが問題となり、他方で移民と労働災害と不況を経て失業と労働者保護の問題が浮上し、そして全体として中産層に拡大する繁栄の果実をいかに賢明に生かすかという視点が出現した時代だった。

本セッションは、2時間の枠組みで、3本の報告を行う。第一報告（佐藤方宣）は「市場の倫理／競争の倫理——戦間期アメリカからの視点」と題して、市場経済に必ずつきまとう競争と倫理をめぐる問題群をとりあげる。とくに問題となったのは市場社会自体に倫理性があるかという問題と、企業の社会的責任を問う動きであった。第二報告（江里口拓）は「1910年代以降アメリカにおける社会保険の軸」として社会保障の領域で労働にまつわるさまざまな問題に解決を与えようとしていった過程について検討する。第三報告（生垣琴絵）は「消費と生活水準——経済学と家政学での取り組み」として消費論を取り上げる。消費の拡大は消費者教育の必要性を提起し、家計における消費の科学としての消費経済学と家政学の同時発展を促した。それに引き続き、江里口拓、原谷直樹2名の討論者が論点の提出を行う。

本セッションは、経済社会問題とそれへの対応、20世紀転換期から大戦間期アメリカ経済思想史への着目という2点の特徴をもっている。第一に、経済学そのものの境界の変動を意識しながら、経済学を含むアカデミズム内外、他の学問領域、経済社会思潮に目配りを行いたい。当時のアメリカの経済学者たちは、新しい問題群の発生に対して、「既存の経済学」では対応できないことを強調し、そこから積極的な意義を導き出していた。第二に、この時代の思想の国際交換には目覚ましいものがあり、このセッションでも可能な限り思想の国際連関を意識したい。その上で、欧州やイギリスとも異なるアメリカの特徴を明らかにするてがかりをつかみたい。